

書評特集・井頭昌彦著『多元論的自然主義の可能性―哲学と科学の連続性をどうとらえるか』

## クワインはなぜ物理主義を採用したのか

成瀬尚志

### 一、はじめに―共通点と相違点

本稿では、井頭の『多元論的自然主義の可能性―哲学と科学の連続性をどうとらえるか』（以下『多元論』）の議論に従って、井頭とクワインの共通点を確認し、『多元論』とは逆に「なぜクワインは物理主義を採用したのかについて検討する。それは『多元論』の中でなされているクワイン批判に対する答えとなると同時に、井頭多元論に対する疑問点を提示することになるからである。

まず、『多元論』では「体系内在主義」と「経験主義的基礎づけ主義の不可能性」を論拠に、「仮説演繹法以上の正当化手続きの存在を否定し、「哲学が科学に先行しそれを基礎づける」という第一哲学的構想を退ける立場」という形で最小限の自然主義が取り出されている。クワインがしばしば自然主義と同一視する自然科学主義や物理主義も最小限の物理主義に付け加えられるオプシオンに過ぎず、自然主義を採用ことがそのまま自然科学主義や物理主義を採ることになるわけではない、という井頭の指摘はもっともである。この議論はクワインのテキストから導き出されており、クワイン自身も異論はないだろう。

ではこの共通点から井頭が物理主義を採らず多元論へと進む理由は何であろうか。一つは物理主義をとる論拠が

ないという点であり、『多元論』、p. 81、もう一つは物理主義が多様なディスコースの事実性を認めることができないという点である。『多元論』、p. 169。前者に関しては、その論拠として物理学のもつ説明力や予測力の高さなどを挙げることができるかもしれないが、そうした論拠が自然主義を導出する議論の中で見出しきれないため、自然主義と物理主義を切り離すことができるという井頭の主張はもつともである。では後者に関してはどうか。そこで両者は明確に対立している。クワインは物理的に記述可能なものだけに事実性を付与するのに対し、井頭はそれ以外の多様なディスコースに対して事実性が付与されるべきであると主張する。クワインは事実性をそのような形で限定することに特に問題を感じていないのに対し、井頭はそれを問題視する。ここに「事実」という語をどのように用いるべきか、という用語上の問題以上のものがないのであればこの点における対立は表面上のものに過ぎない。

井頭は、物理主義が多様なディスコースに事実性を認められないという物理主義の問題点の回避の仕方として次のように提案している。

もしある物理主義者が「意味や命題的態度に関する言明、およびそれを用いてなされる言語学・倫理学・心理学などの言明は事実を表現するものではないと（本気で）主張するならば、この批判を回避して物理主義の立場を保持し続けることができるのである。『多元論』、p. 173]

しかしこの選択肢は『多元論』では検討の対象とされていなく、『多元論』、p. 173] ため、「多様なディスコースに対して事実性を認めることができない」という物理主義に向けられた批判は、井頭多元論に立ったときの問題

点でしかなく、それらに事実性をそもそも認めない立場にとってそれがどのような問題を引き起こすのかは明確ではない。クワインは多様なディスコースの有用性や物理的事実への還元不可能性を認めているため<sup>②</sup>、それらに事実のレッテルを貼らないことがどのような意味で問題となるのかについては説明を要するであろう。いっぽうでこの議論はそのまま物理主義にも向けられる。なぜ物理的事実だけに事実が制限されるのかについての説明責任が物理主義側にも発生するのである。

この点を別の角度から見よう。自然主義の基本原理である体系内在主義では、真理は体系内在的にしか意味をもたない。つまり、真理あるいは事実は体系に相対的なものでしかなく、その点では物理学もその他の理論も変わりがない。

われわれが存在すると容認するものはすべて、理論・構築の過程を記述するという点から見ると措定物であり、構築されてしまった理論に立って見ると実在そのものである。[Quine, 1960, p. 22]

クワインは、科学理論の中の存在者ですら措定物に過ぎず、またそれらによって記述される事実というのも何らかの特権性をもっているわけではないと考えており、次の富田恭彦氏によるインタビューにおいてもその点は明確である。神経末端や体表刺激といったものも「作られたもの (our making)」であるという両者の共通理解に基づいて、うさぎと神経末端などの物理的な概念との相違について行なわれたやりとりをみてみよう。

富田…しかし、そこ〔うさぎと神経末端〕には優位性に関する違いがあって、その違いがあなたの認識論的見解に現れているわけではありませんか。

クワイン…何の違いですか。

富田…認識論においては、神経末端とか体表刺激とかいったものが優位性をもつということです。

クワイン…さて、どうでしょう。それらはうさぎと同じ位置のものと云えると思いますが。

富田…私が先ほどの箇所<sup>③</sup>に注目するのは、あなたの認識論的見解においては、現代科学に由来するいくつかの概念が目立った優位性を持っているということが示されるからなのです。

クワイン…それは違います。何に対する優位性だというのですか。

富田…通常の事物に対する優位性です。

クワイン…そうではありません。それらは同じ位置にあります。〔富田、1994, p. 32〕

この会話からもクワインが体系内在主義者としてあらゆる事物を差別なく均一にとらえていることがわかる<sup>④</sup>。また、クワインが真理について説明する場面においても、必ずしも物理的事実に関するものだけを真理とみなしているわけではないことがわかる。こうしたことから、多様なディスコースに事実性を付与するかどうかという点を括弧に入れると次のようにまとめることができるだろう。井頭は多様なディスコースが表現する「事実」をすべて均一に扱っており、体系内在主義をとるクワインの議論の中でもその均一性は認められるいっぽうで、明らかにクワインが物理学を特別視している場面があるという点が事態の見通しを悪くしているのである。以下ではクワインが物理主義を採用している理由を検討することで、なぜその均一性が崩れるとクワインが考えているのかについてみ

てみよう。

## 二、物理学を特別視する理由——翻訳理論と物理理論はどのように異なるのか

クワインによる物理学の特別視が顕著に表れているのが、翻訳の不確定性と理論の決定不全性の議論においてである。クワインは翻訳理論と物理理論がともに経験的データから一意に決定されないという点で両者に平行関係を認めながら、それでもなお物理理論のほうにだけ「ことの真相」があると主張する。

進化しつつあるわれわれ自身の学説全体のうちにあって初めて、われわれは可能なかぎり真剣にそして絶対的に真理を判断しうるのである。[Quine, 1960, p. 25]

『ことばと対象』のこの有名な一文は、真理を科学理論に内在的なものとすることで相対主義に陥らないかという疑問に対するクワインの回答であり、(楽観的な?)物理主義者としてのクワインをよく表している。物理理論がこのような形で理論の内部から「真理」や「ことの真相」を判断することができるのであれば、翻訳理論も同様に理論の内部から命題の存在を主張できるのではないかと井頭は主張する。理論の内部から同義関係を絶対的なものとして扱い、それにより、その理論が措定するものの事実性を認めることを井頭は「セクト主義的な対処法」と呼ぶ。確かにクワインが物理理論にだけ「ことの真相」を認めるのは、まさにこうした「セクト主義的な対処法」を物理理論のほうにだけ認めるからである。クワインがそうするのは、「物理理論だけが事実を記述できる」という物理主義者の前提があるからである、と井頭は主張する。

ひとたび翻訳の不確定性が認められた後に登場してくるセクト主義的対処法を回避する際に重要な役割を担うのは〈事実〉の範囲を制限する存在論的テーゼとしての物理主義なのである。『多元論』、p. 154]

クワインがこのセクト主義的対処を翻訳理論のほうに認めないのは、事実を引き出してくる、その元となる真なる文の集合を物理理論だけに制限しているからであると井頭は主張する。この二つの不確定性の議論においてクワインが物理主義を特別視する理由が、井頭の言うとおり、「物理学だけが事実を記述できる」というある種論点先取的な前提によるものであればまったく説得力を持たないであろう。「多様な知的探求を包摂する「われわれの信念体系」の中から特に自然科学のみを抽出しそれを特別視するための議論は、少なくとも自然主義を導出する際のクワインの叙述の中には見いだされない」『多元論』、p. 61] という井頭の主張はもともとであるが、それ以外の部分でもそのような「特別視するための議論」を見出すことはできないだろうか。以下では、物理理論を他の理論あるいはディスコースから、物理主義的な前提（真なる文の集合に制限をかけるという方策）に頼らずに特別視することができるかどうかについてクワインの議論を参考にしながら検討してみよう。

根源的翻訳の場面において、フィールド言語学者は無数の文を取り扱うため、ひとかたまりの文のみを分析の単位とすることはできず、文を、そこに繰り返し現れる適当に短い部分に分節化し、それらの部分と自らの言語の部分との間の対応付けを行わざるを得ない。その対応付けについての仮説をクワインは分析仮説と呼ぶ。クワインはその分析仮説についてこう述べる。

それぞれの分析仮説も、またそれらがすべて集まってできあがる壮大な総合仮説体系も、ある不完全な意味

ではか仮説とはいえないものである。「分析仮説による翻訳のケースを」刺激意味の類似性による場面文「Gavagai」の翻訳のケースと対比させてみよう。この翻訳は間違っている可能性はあるが、サンプルの観察から得られた真正の仮説である。[Quine, 1960, p. 66]

クワインは「ガヴァガイ」のような場面文あるいは観察文は、観察文に同意を促す刺激の総体としての刺激意味と因果的に結びついているため（一語文としての観察文の）翻訳は確定すると考えている。いっぽう、観察文からさらに翻訳を進めるためには先ほど見たように分析仮説が必要となるが、それは「仮説」ですらないとクワインは言う。ここに、翻訳理論と物理理論をクワインが区別できると考える理由がある。この点について以下でみてみよう。まず、クワインが翻訳の不確定性の議論で否定している「意味」や「命題」は「言語から中立に存在するもの」と理解されていることに着目すべきである。<sup>(9)</sup>

観察文はうまく皮がむける。観察文の意味、すなわち刺激意味は、他の言語的干渉を受けぬ純粹なものとしてあらわれるからである。……‘Neutrinos lack mass’、エントロピーの法則、光速不変の法則と言った理論的な文はもう一方の極にある。とりわけこの種の文に関して、ウィトゲンシュタインの格言《文を理解することとは、言語を理解することにはかならない》が当てはまる。その種の文や、これらの両極に横たわる無数の文は、言語的に中立の意味など持っていないのである。[Quine, 1960, pp. 76-77]

クワインが翻訳の不確定性の議論で否定しているのは、「個々の文や語は言語全体のコンテクストの中でのみ意

味を持ちうる」という体系内在的で全体論的な意味論に反する。また、言語間の同義性について語ることを可能にするような意味概念である。では、体系内在的にのみ認められるような「意味」や「命題」についてはどうか。まず、言語間でやり取りできないそうしたものを果たして「意味」や「命題」と呼ぶことがふさわしいかどうかという問題に加えて、そうしたものについて同一性を明確にできるほどにはっきりと語れるかどうかについてクワインは疑問視する。この点について物理理論と比較しながらみてみよう。

‘Gavagai’-と‘There’s a rabbit’とは、それぞれ原地語の話者と英語の話者にとっての刺激意味を持っており、われわれの推測が正しいにせよ間違っているにせよ、それら刺激意味はほぼ同一であるかはっきり異なるかのいずれかである。ところが、典型的な分析仮説については、そのようなことはまったく意味をなさないのである。その要点は、分析仮説の真偽にわれわれが確信を持ってないということにあるのではなくて、(‘Gavagai’のケースには存在したような) それについて真偽を言うべき客観的事態すら存在しない、ということにある。[Quine, 1960, p. 73]

われわれは翻訳の同義性は、最悪の場合でも物理学における真理と同様の状態にある、と結論してよいだろうか。そのような結論を下して安堵することはここで問題にしている。「物理学と翻訳との」平行関係を誤ってとらえることにほかならない。文の真理性についてはよりいっそう包括的なならかの理論の中でしか語ることができないというものの、このことはさほどわれわれを悩ますものではない。というのは、われわれは、試行的なものであるにしても、常に不足のない程度に包括的なある理論の中で作業しているからである。……



ほとんどの場合、真理性のパラメーターは都合よく固定している。翻訳のパラメーターを構成する分析仮説についてはそうはゆかない。われわれは分析仮説のどの組をも援用せずに、(実に、分析仮説の組がまったくない場合ですら) 外国人の言葉の意味についていつでもあれこれ考えられる状態にある。だが、その言葉が分析仮説に頼らなくても翻訳されるような限られたものでないならば、すべての言語行動と同等に両立する二組の分析仮説は、それぞれ対立する答えを与えうるのである。[Quine, 1960, pp. 75-76]

「真理性のパラメーターは都合よく固定している」という部分は、その前の部分で「常に不足のない程度に包括的なある理論の中で作業している」ということから、例の「進化しつつあるわれわれ自身の学説全体のうちにあつて初めて、われわれは可能なかぎり真剣にそして絶対的に真理を判断しうるのである」と同じく、真理の体系内性についての話をしていると考えられる。つまりここでの「パラメーター」とはある文を真とみなすために機能している理論や信念の部分のことであると考えると考えられる。いっぽう、翻訳理論のほうは行動主義的データから自由に相手の言葉の意味について考えることができ、それゆえ二つの分析仮説は対立しうるということが述べられている。この点について『真理を追って』の中の知覚に関する説明をみてみよう。

観察文から離れるにしたがつて、知覚を帰属する際には、帰属する人間の側に背景となる知識や推測をますます多く必要とする。[Quine, 1992, p. 64]

〔先ほど見たように〕知覚の帰属は、内容説が観察文からそれ以外のものへ、そして最後は持統文<sup>7</sup>へと移るに

従って、ますます内容のやせた推測的なものとなる。信念の帰属ともなれば、その内容はもっとやせ細り、それを裏付ける証拠は拡散してしまっている。……「pであることを知覚する」という構文は言語の伝搬にとつて本質的なものであった。そして観察できるレベルでは、その構文は経験的証拠によって十分コントロールされていた。しかしながらそれは、外挿、類推、また外挿、と繰り返されて、最後には無法状態にある数えきれない鳥合の衆を生み落してしまった。すなわち信念の帰属である。信頼できる信念帰属も胡乱な信念帰属へと等級を下げてしまい、境界線を引こうにもはや絶望的だ。[Guine, 1992, p. 67]

これらの引用がさきほどの『ことばと対象』と同様の議論をしていると考えると、クワインの言う「パラメーター」(あるいはパラメーターである分析仮説)には「外挿」や「類推」あるいは「感情移入」などが含まれると考えられる。翻訳はこの引用で示されているように、命題的態度が関わってくる段階では、「外挿」や「類推」あるいは「感情移入」などを繰り返さないと進まないため、もはや元となっていた行動主義的データからあまりにも自由に事を進めることができてしまう、ということであろう。そうすると、「真理性的パラメーターは都合よく固定している」ということも理解できる。物理理論の場合は、データに基づいて理論を構築する際の自由度が低いというように解釈できるだろう。<sup>(8)</sup> もちろん物理学の真理も理論に内在的であり、しかもその理論が決定不全性にさらされている以上、物理学の真理も理論に相対的なものでしかない。しかし、われわれが手にできるデータに基づいて真摯に作られた理論であるなら、「仮説演繹法以上の正当化手続きの存在を否定し、「哲学が科学に先行しそれを基礎づける」という第一哲学的構想を退ける」最小限の自然主義からは、それらの理論に実質的な相違を見出すことはできず、それゆえわれわれは安心して理論の内部から絶対的に真理を判定できると言えるのである。<sup>(9)</sup>

ここまでの議論をまとめてみよう。翻訳理論と物理理論はともにデータに基づいて探求しているという点では変わらない。翻訳理論のほうを見てみると、クワインは観察文に関しては、一語文で見た場合には言語に中立な意味と言えるようなものがあることを認める。それは体表刺激という客観的データだけに基づいて観察文の同意・不同意について説明することができるからである。その段階では分析仮説が必要ないので、パラメーターは安定していると言える。しかしそこからさらに翻訳を進めていくには分析仮説が不可欠となる。さらに、先の引用で見たような命題的態度が関わってくる段階では事態はさらに複雑となり、翻訳の出発点となっていた一語文としての観察文からあまりにも自由に翻訳を進めることができ、もはやある文が世界の何について語っているのかについて明確に語ることはできなくなってしまう。このように、分節化の問題に加え、背景知識や類推や外挿や感情移入といったようなものが必要となる翻訳理論においては、「世界の中の何かを探求している」というよりは一種の「技」のようなものに近いといえるだろう。そこでの探求は「コミュニケーションがうまくいくかどうか」というような段階的・的なものでしかなく、世界の何かが明らかにされるような類の探求とは言えないようなものである。

いっぽう、科学理論は、評価の基準がプラグマティックなものであるという点では翻訳理論と同じであるが、翻訳理論と比べてデータから理論を構築する際の自由度はそれほど高くない（つまりパラメーターが固定されている）ため、データに基づいて（世界の中の）何か（つまり「ことの真相」）について語っていると考えることができ、それが成り立っているか否かについて真か偽かというクリアーな二分法で語ることが可能な営みであるというように記述できるのである。もちろんテストをして反証されたときに、理論のどの部分を直すべきかがすぐに明らかになるわけではないし、そうしたことの真相は理論に内在的なものではあるが、物理理論の仮説は世界について何かを語っているというように記述できるという点で、世界についての真正の仮説であると言えるのである。このよう

な理由から物理理論は、客観的なデータだけに基づいて探求できるため、立場や状況や背景知識の異なっている人同士でも同じものについて語っていると見えるような「ことの真相」を「世界の中に」見出すことができるのである。まさにこの点をもって物理学の客観性を主張することもできるのでないだろうか。

### 三、近位説 (proximal theory) と遠位説 (distal theory)

前節での議論から、われわれは物理主義的前提によらずに翻訳理論と物理理論を区別することができることが分かった。それがまさにクワインが物理学を特別視した理由であり、クワインが物理主義を採用した理由であると考えられる。クワインがそうした物理主義を強調するのは主に認識論についての議論においてである。それゆえ本節ではクワインの物理主義についての見通しをさらに良くするために、クワインが物理主義をどのように認識論に適用したのかについてみることにする。以下ではデイヴィッドソンとの間でなされた近位説と遠位説についての議論を検討し、クワインがデイヴィッドソンの批判に対して頑強に物理主義を維持した理由についてみてみよう。

デイヴィッドソンは論文「意味・真理・証拠」において、クワインが観察文を「刺激」との条件付けによって説明する際、その観察文の同意・不同意が条件付けられている「刺激」には二つのものがあると指摘する。一つは「体表刺激」であり、もう一つはその観察文が主題としている物や出来事や状況である。デイヴィッドソンは前者の解釈を近位説、後者を遠位説と呼び、被験者やフィールド言語学者が知ることができる<sup>⑩</sup>近位的刺激によって観察文を説明することは懐疑論を招きかねないとして批判する。クワインは自身の記述の中にそうした混同があったことを認め、自分が近位説をとるのは認識論においてであると<sup>⑪</sup>する。この点についてクワインが詳しく論じているので、少し長くなるがそのまま引用しよう。

神経末端を持ち出す唯一の理由は、参照点の均質性にあります。うさぎ説に取って代わるものを見ますと、そこにもまた、「寒い」のような観察文の問題があります。何がそれに対応する対象なのか。「うさぎの場合には、うさぎ。」よろしい。観察文に関係するうさぎがいる。では、「寒い」や「雨が降っている」の場合はどうでしょう。これらの場合、何が関係する対象なのでしょう。か。「なんてことはない。状況ということにしましょう。」これは、状況を対象として前提する、歓迎すべからざる存在論です。「それなら、うさぎを前提することにしなすう。」

うさぎは、神経末端と同じ位置にあります。しかし、神経末端を観察文の相関者として取り上げるのは、観察文が個々の一連の音声の均質な集合をなすように、神経末端は、常に、特定可能な対象のかなり均質な集合をなすからです。そういうわけで、われわれは観察文と受容器群の集合との間に、理解可能な相関関係を樹立することができるとです。

もう一つの考えは、観察文と例えばうさぎの集合との間に、ある相関関係を立てるといふものです。結構です。しかし、観察文が「寒い」の場合や、もっと複雑な観察文の場合はどうでしょう。たとえば「黒猫が犬に向かって毛を逆立てている」という状況を表す観察文の場合は、何がそれに関係している対象なのでしょう。猫ですか。それだけではありません。黒い猫です。もっとありますよ。その猫は何をしているのですか。犬がいて、猫はその犬に向かって毛を逆立てています。そこには非常に複雑な対象があります。それは複雑ですが、一つの対象です。

しかし他方、すべての観察文は、きわめて直接的な仕方、神経末端群と関係づけることができます。そして、さまざまな対象からのこれらの因果的变化は、すべて、体表を通過する際のしばらくの間、一様な仕方

凝縮されます。それから、それらの因果的变化は脳に達して、すべてが再び複雑になります。したがって、因果的变化を捕らえ、同定し、名づけ、区別することが容易にできる場所というのは、体表における移行の場合です。[畠田、1994, pp. 32-33]

このようにクワインは遠位的対象があいまいであるがゆえに拒否する<sup>(1)</sup>。クワインは、「うさぎ」も「神経末端」もともに物象化(reification)、つまり対象の措定を前提としていることを認めるが、「参照点の均質性」というプラグマティックな理由で後者を選択するのだ。「神経末端の状態」を観察文と結びつけることは複雑なように見えるが、神経末端は有限であり、かつ、「発火しているか否か」というきわめて単純な仕方で記述することができるのである。

いっぽうで、意味論に関しては遠位説を採ることをクワインは認める<sup>(2)</sup>。ある語が何を指示しているのかという問いには、通常の事物を前提としないと話が進まない。しかし、理論と証拠との関係を探求する認識論においては、まさにそうした事物の措定がどのようにしてなされるのかを証拠の観点から探求するので、そうした事物に関する物象化を前提にすることはできない。とはいえ、刺激や神経末端を観察文と結びつける近位説においても、まさにそれらの物象化を前提としているという点で遠位説とは変わらないのではないだろうか<sup>(3)</sup>。しかし、それらは物象化のプロセスの解明において有意義な道具立てとなるといえる点で異なり、まさにこの点にこそクワインが物理主義的な近位説をとる理由があるのである。ではなぜそうした説明を与える必要があるのか。クワインは『真理に追って』の中で、真理の引用解除説について説明した後で、「ある文を真と呼ぶことが単にそれを肯定することであるにしても、それを肯定すべきかどうかを私たちはどうやって語れるのか」という問いを出している。われわれのもって

いる信念体系を広くとったとしても、また、狭く科学理論に限ったとしてもこの問いは出てくるであろう。たとえば、科学における真理の場合、「科学の成功」によって説明することは可能である。しかしさらに問うことは可能である。なぜうまくいったのかと。<sup>16</sup> 近位説的な説明が、まさにこの問いに対する回答を与えているのだとクワインは述べる。<sup>17</sup> つまり、理論が体表刺激という証拠からどのように導き出されたのかについての説明を与えることである。しかし、こうした考えに対して、デイヴィソンは「概念図式」と「内容」の二元論に陥っているとクワインを批判したのではなかったか。<sup>18</sup> それに対してクワインは、論文「いわゆる第三のドグマについて」において、「経験や感覚面刺激の正当な役割は、真理のための基盤ではなく、保証された信念 (warranted belief) のための基盤としてのものなのである」<sup>19</sup> と応えている。つまり、クワインの認識論において刺激はある文を真にするために用いられているのではなく、その信念体系や理論が「保証されている」ことを示すためである。刺激との結びつきで与えられるのは、その文が真であるということでも、また、「正当化」ということでもなく、物理的に記述されたデータとの関係で記述できるということであり、その説明が与えられることがある種の「まっとうさ」(クワインの言葉では「保証」)を示しているのである。

#### 四、まとめ―探求活動と認識論

これまでの議論をまとめてみよう。真理や事実は体系内在的にか意味を持たず、よって、理論や信念体系に相対的なものである。それゆえ、体系内在主義の立場からは体系ごとの「事実」の身分はすべて同等である。いっぽう、クワインが認識論として探求したのは、人間がインプットとしての刺激からいかにしてアウトプットとしての理論や信念体系を構築するのかについてであった。つまり、われわれはなんらかの理論や信念を有しており、それ

に基づいて世界や事実について把握しているが、われわれのこうした世界や事実についての理解は「まっとう」なものであるのか。この問いが認識論にとっての根本的な問いであると言えよう。この「まっとうさ」について、たとえば、カルナップは『世界の論理的構築』において（疑いようのない）感覚与件から科学理論を構築するというプログラムで説明を試み、クワインは体表刺激から観察文を通して理論が構築される過程を記述することでその説明を与えようとした。認識論をこのように考えるならば、これまでの議論（あるいは『多元論』やクワインの議論）は、「世界や事実はいかにして探求されるか」という問い（最小限の自然主義や体系内在主義や「存在論的オプショソンの議論」と、「そのようにして把握された世界や事実についての知識（あるいは信念）はまっとうなものであると言えるのか」という問いとの二つの部分から成っていることがわかる。前者の問いは後者に含まれ、その全体をクワインは認識論の議論として提示しているのである。クワインが物理主義を強調するのは証拠と理論との関係を明らかにしようとする場面であり、我々の信念体系のまっとうさを示すための証拠として用いるのに最もふさわしいのが物理主義的記述であると考えられるからなのである。

このように議論を整理すると、井頭多元論とクワインの物理主義との関係性が明確になる。井頭多元論が重視しているのは「世界や事実はいかにして探求されるか」という問いである。そしてこの問いに対しては、クワインの議論をすべて引き受けたとしても、井頭の指摘通り、物理主義以外の多様な探求を最小限の自然主義の内部で行なうことが可能である。いっぽう、そうした多様な探求において用いられる理論や信念体系はまっとうなものであるとなぜ言えるのか、という問いに対してはどうだろうか。もちろん、理論や信念が形成される中で仮説演繹法による淘汰や理論修正がなされているのは事実であり、「なんでもあり」なわけではない。しかしそうした淘汰や修正も含めた探求活動は個別の学問分野の中ですで行なわれているものではあるが、客観性を求めるためには、その



探究活動を行なっているコミュニティーの外部からでもそのまっとうさが示される必要がある。そのためにはそうした学問分野内での探求とは別の形でそのまっとうさを問う必要がある、それこそが認識論が担う役割なのではないだろうか。クワインが認識論において物理主義をとるのは、二節でみたように何について語っているのかについて明確であるからであり、その議論は「事実」を導き出す「真なる文の集合」をどうとるかとは独立に導き出すことができた。それにより、明確に語ることができる「体表刺激」をデータとして我々の信念体系のまっとうさについて探求したのであった。このことは結果として物理学の客観性を示しているともいえるだろう。<sup>(20)</sup>

ここで本稿の出発点に戻ろう。井頭とクワインの違いは「多様なデイスコースに事実性を付与するかどうか」という問いではなく、「事実性に関して多様なデイスコースは均一であるのかどうか」という問いに見出されること  
が分かった。クワインは物理学が有する客観性に基づいてその均一性を認めない。体系内在主義者としてクワインは多様なデイスコースにおけるある種の事実性を認めることができるが、それは表現上の問題に過ぎない。もちろん自然主義をとることがそのまま物理主義をとることになるわけではない、という点は井頭の指摘通りである。しかし物理主義が自然主義の一つのオプションであり、活動中の研究プログラムであるとしても、本稿での議論が有効であれば、物理主義という研究プログラムは非常に有望なプログラムであろう。これまでも見たとおり、物理主義は多様な探求活動（あるいはデイスコース）を排除するわけではない。また、多元論が自然主義の内部で研究プログラムとして進められることに物理主義者も異論はないだろう。しかし、多元論が物理主義と「事実」という用語の使い方に関する表面上の違いではなく、実質的に異なるプログラムであるならば、物理主義者は多元論者に対していまや次のように問うことができるだろう。「多様なデイスコースが事実性に関して均一であると考える理由は何か」と。この問いに対する回答が井頭多元論のアイデンティティを明確にするだろう。

参考文献

- [Davidson, 1984] Davidson, D., "On the Very Idea of a Conceptual Scheme" in *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford University Press, 1984.
- [Davidson, 1990] Davidson, D. (1990), "Meaning, Truth, and Evidence" in Barrett and Gibson, *Perspectives on Quine*, Blackwell, pp.68-79.
- [Quine, 1960] Quine, W. V. (1960), *Word and Object*, MIT Press [邦訳『ことばと対象』大出、宮館訳、勁草書房、一九八四年]
- [Quine, 1977] Quine, W. V. (1977), "Facts of the Matter" in W. Shahan and C. Swyer (eds.), *Essays on the Philosophy of W. V. Quine*, Norman: University of Oklahoma Press, pp.155-169.
- [Quine, 1981] Quine, W. V. (1981), *Theories and Things*. Cambridge: Harvard.
- [Quine, 1992] Quine, W. V. (1992), *Pursuit of the Truth*, 2nd ed. Cambridge: Mass [邦訳『真理を追って』伊藤、清塚訳、産業図書、一九九九年]
- [Quine, 1999] Quine, W. V. (1999), "Where Do We Disagree?" in *Philosophy of Donald Davidson*, Open Court, 1999, pp.73-79.
- [富田一九九四] 富田恭彦 (一九九四) 『クワインと現代アメリカ哲学』、世界思想社。

注

- (1) クワイン自身は物理主義の議論の中で「事実」に関してはおそらくほとんど言及しておらず、「ことの真相 (fact of the matter)」という用語を用いている。クワインが「事実」ではなくあえてこのような用語を用いたのは「事実」という語が含意している様々なことから独立に物理主義を説明したからなのかもしれない。実際クワインは「事実」という概念を批判的に取り上げている ([Quine, 1960, pp. 246-248] 参照)。井頭も物理主義と事実とを結びつける議論はクワインからではなく、ピノウから取り出しており、クワインの議論からは間接的にしか取り出していない ([『多元論』 p. 188] 注八九参照)。こうしたことから井頭の定義した物理主義とクワインの物理主義は異なっているのかも知れないが、ここではその点については立ち入らない。
- (2) 「それでも心理主義的な述語は、その曖昧さにもかかわらず、長年の間互いに関係し合うことによって、人間の行為を予測し説明するための古くからの戦術を生み出してきた。心理主義的述語は、科学的述語に対するその共認不可能な在り方において、自然科学を補つものである。そして社会科学にとって、また日々のつきあひにとっても不可欠である。」 [Quine, 1992, pp. 72-73]
- (3) [Quine, 1992, pp. 41-42]

- (4) ここで述べられているのは事実の均一性についてではなく、存在者あるいは対象の均一性についてであるが、この相違はここでの議論においては問題とならないだろう。
- (5) たとえば [Quine, 1960, p. 24] では「ブルータスがシーザーを殺した」という文を用いて真理の体系内在性について説明している<sup>90</sup>。
- (6) [Quine, 1960, p. 761]
- (7) 持続文 (standing sentence) とは「タイムズ紙が来た」のようにある程度の期間同意を促すような文のことである。
- (8) つまるるところこの違いは、人間を相手にしているか世界を相手にしているかの違いであり、もっと端的に言うならば、命題的態度が問題となるかどうかの違いであると言えるかもしれない。そう考えると、むしろ特別視されているのは物理理論ではなく翻訳理論のほうであり、そうであれば、物理主義者は本論での議論に加えて、諸科学の中で物理学が特別視される理由をさらに与える必要があるかもしれない。
- (9) 「グローバルな科学の経験的な決定不全性が示しているのは、世界を思い描く様々なやり方がある、そのどれもが擁護可能だということだ」[Quine, 1992, p. 102] というクワインの発言からもわかるようにクワインは理論の決定不全性が理論間に表現の違い以上の実質的な違いを生むとは考えていない。おそらくこの主張は本論でも述べたとおり、最小限の自然主義から導き出されると考えられる。
- (10) [Davidson, 1990, pp. 56-57]
- (11) この節での議論からわかるように、クワインが認識論において遠位説をとらない理由と、前節でみた翻訳にことの真相を認めない議論とはパラレルな関係にあると言える。
- (12) [畠田<sup>1</sup>, 1994, p. 37]
- (13) われわれは最小限の自然主義の立場から、さまざまな探求を行なうことができるが、それぞれの探求の「まっとうさ」についてさらに問うことができるのである。この点については後に述べる。
- (14) 井頭があらゆる探求活動に対して事実性を付与しているのとパラレルに、クワインはあらゆるものが措定物であり、物象化を前提としていて考えている。次の引用からはそこからなぜ物理主義や近位説へと舵を切ったのかがよくわかる。
- 私は被験者が一步一步物象化していく過程、うさぎ等々を物象化していく過程を研究したいと思っていますので、すでにそれがなされているということを前提したくありませんでした。そして、デイヴィッドソンがはじめにそれを前提するのを批判しました。今私は、これが間違いであることを悟っています。なぜなら、私もまた、体表の刺激に関する説明においてさえ、前提しているからです。つまり、体表を前提し、神経末端を前提し、神経末端がある身体を前提しているのです。そしてその場合、被験者が神経末端等々について知っていることを、想定してはけません。

同様に、もし私が好めば、デイヴィッドソンが好むように、私はうさぎから始め、被験者がうさぎを物象化していると想定することなく、うさぎということばを用いて被験者の刺激について語ることができるでしょう。そして、それでもなお私は、被験者の漸進的物象化を研究することができるでしょう。

私はずっと体表刺激に固執することを正しく思っていました。その理由を正しく把握してはいませんでした。しかし今は、正しく把握していると思います。つまり、適切な理由は、あらかじめ物象化を仮定することは関係していません。その理由は単に、刺激について語ることにすれば、外部の物のカオスの代わりには、単純な、容易に比較できるものを、語るべき単位としてもつことになる、ということでしょうかありません。そこではあらゆるものが局所化されるのです。そして、問題はただ、われわれは何を原因として語るのが都合がよいか、観察文は何に対して条件づけられていると言っているのが都合がよいのか、ということだけなのです。〔富田、1994, pp. 39-40〕

(15) この近位説を支持するクワインの説明は、二節でみた物理理論を特別視するための議論によって補充することができるだろう。

(16) 次の引用がこの点を明確に示している。「近位的なものへの私の関心というのは、意味論的というよりも認識論的のものであった。そこで問題となっていたのは、翻訳者が何を行なっているのか、あるいは何を行なうべきかということではなく、なぜそれがうまく働くのかということだけだ」〔Quine, 1999, p. 160〕

(17) [Quine, 1992, p. 93]

(18) [Davidson, 1984]

(19) [Quine, 1981, p. 39]

(20) これまで見てきたように物理主義的証拠は異なるディスコース間においても共通の証拠として用いることができるため客観性が高いと言える。このように物理主義に客観性を付与することはわれわれの日常生活における「事実」のとらえ方とも合致している。たとえば裁判においてはDNA鑑定は目撃証言よりも証拠としての価値が高いということもその裏付けとなるだろう。また井頭が『多元論』の三二一六で挙げている、「同時死」の推定などの「法学的な死亡」もあくまで証拠が足りない時の「暫定的な処理」であり、それを「生物学における死」とともに「事実である」として同等に扱うことは、多くの問題を背負い込むことになるのではないだろうか。

(21) たんびんば [Quine, 1977, p. 168] "Ordinary language is only loosely factual" 日常びんば。  
(なるせ たかし・長崎外国語大学)